

教材の本質をふまえた体育指導のあり方 ～ 体づくり運動、基本の運動を通して ～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

- (1) 理論研究や授業づくりの話し合い等を通して、子どもたちが主体的に取り組むことができる学習内容や学習過程を考え、授業案を作成する。
- (2) 授業案をもとに授業実践を行う。その成果と課題について話し合い、今後の授業や研究に活かしていく。

2 理論研究

- ・新学習指導要領の「体づくり運動」についての学習
- ・加納岩小学校須藤将行教諭による「体づくり運動の指導法」実技講習会

3 授業研究

5年「はずませよう！心と体！」（体づくり運動）

授業者 梶原美奈子教諭 牧丘第二小

- ・コーディネーション運動の理論を取り入れた体づくり運動の授業を行った。
- ・体の柔らかさと巧みな動きを高めるためにコーディネーション運動を取り入れた授業構成で行ったが、その指導構想や運動の取り上げ方がとてもよく、子どもたちの実態にも合ったよい授業であった。
- ・巧みな動きを高める運動では3つの場において、子どもたちがやってみたくて意欲をかき立てられる種目の設定がされており、学習の場づくりとして、とてもよかった。
- ・体ほぐしの運動では、Gボールを使った活動を取り入れた。
- ・運動の日常化に向けた、授業以外での取り組みも素晴らしかった。

3年「ひか”ワ”（なわ・輪・友達の和）オリンピック2009」

（基本の運動 用具を操作する運動）

授業者 日野原和貴教諭 日川小

- ・新学習指導要領の「体づくり運動」への移行を考慮し、身に付けさせたい動きを意識した基本の運動の授業を行った。

- ・用具を操作する運動で、特になわと輪を取り上げた。輪を操作する運動では、回す、転がす、投げるといった動きを身に付けさせるために、それぞれの動きに2つ、全部で6つの場をつくり子ども達が意欲的に取り組める授業になった。
- ・子どもの意欲が持続し、意欲的に活動するために運動をゲーム化、得点化した。
- ・大がかりな用具もなく、手軽にできるところは、運動の日常化にもつながるものであった。

II 成果と課題

1 成果

- ・これまであまりなされてこなかった「体づくり運動」についての様々な研究が深まった。
- ・2年目ということで、昨年度を継続しながらも、さらに研究が深まった。
- ・昨年の研究を土台にして、体づくり運動の領域への理解を深めることができた。
- ・ブロックごとに理論研究をすることで体づくり運動について理解が深まった。
- ・5年生と3年生の授業実践ができ、積み重ねができた。
- ・用具等を用いて「体づくり運動」をする実践例が紹介された。
- ・高さや幅など、場の工夫を個々の能力に合わせて調整できることにより、多くの児童に体を動かすことの楽しさを味わわせることができた。
- ・あまり実践例のない体づくり運動にチャレンジしたことで、体づくり運動のバリエーションが広がり、体づくりに対する意識が高まった。
- ・運動の工夫や種目を知ることができて良かった。

2 課題

- ・研究の成果を還元できるように考えていきたい。
- ・運動の系統性については、今後の課題である。研究で蓄積をしていきながら、体系化していきたい。
- ・子どもの意欲を持続させるために、どんな運動を選んでいくか、体力要素か運動要素どちらで進めていくかが重要である。また、今年度の成果である意欲を持続させるための運動のゲーム化などを取り入れて様々な運動を考えていく必要がある。
- ・低と高のブロックに分かれてはいるが、冬の授業研については、秋をふまえた上で部会全体としての流れで授業研究をしたい。(今年の場合ならコーディネーション運動やGボールをキーワードとして。)
- ・「体づくり」は、個に向かう面があり、それがプラスにもマイナスにもなる。個、小集団、全体での場の工夫を考えていきたい。

(部長 金井 巖)